

和歌の精神が今の世の中にも

昨日の本格的な雨のお陰で勢いづいたのか、今朝校長室の窓から外に目をやると、ツツジが見事に花を咲かせ、朝陽を浴びていました。草花たちは、マイペースで命の営みを進めているようです。

前回まで話した芭蕉については、まだまだたくさんネタがありますが、田中先生の授業を奪ってしまうわけにはいきませんからね。皆で学ぶ授業を楽しみにしておいてね。芭蕉について君たちが少しでも興味を持ってくれたら、私としてはとてもうれしい限りです。

というわけで、今日は違う話題にしますね。違う話題といっても、古典に関係があるのですよ。今日の私の文章を読んで、「どれどれ、教科書を見てみようかな」と思ってくれたら幸いです。

連休中にあるテレビ番組を見ていたら、あるスポーツ選手にインタビューをしていた人が、次のように尋ねていました。

「優勝が決まったときは、どんな気もちだったのでしょうか。」

このインタビューに限らず、インタビューとなると多くの日本人が「気もち」を聞きますよね。そのたびに、「日本人は、どうして気もちを聞きたがるのだろう」「気もちにこだわる理由はなんだろうか」と、私は不思議に思っていました。皆さんはそう思ったことはありませんか。

このように日本人が気もちを探る傾向にあるのは、今に始まったことではないようです。これは遠く千年以上前から日本人の生活の一部になった和歌（短歌は和歌の一つです。「短」があれば「長」もあります。また、それら以外の歌もあります。授業で「長歌」が出てきますからね。お楽しみに！）から始まっているような気がするのです。それが現代に



続いているのではないでしょうか。

平安時代に作られた「古今和歌集」（日本で最初の勅撰和歌集です。「ちよくせんわかしゅう」と読みます。天皇の命令によって作られた和歌集のことです。）に、そう思える箇所があります。それは「古今和歌集」の「仮名序」（教科書の百三十四ページ）に書かれています。

「世の中にある人、ことわざ繁（しげ）きものなれば、心に思ふことを、見るもの、聞くものにつけて、言ひ出せるなり。」

難しそうですが、簡単に現代の日本語に直すと、「この世の中の人たちは、いろいろなできごとに関わりながら生きていたので、そのときに心に思ったことを、見たものや聞いたことと関係づけて表現したのだ」となります。

つまり、人は様々なことを経験し、そのときいろろなことを思っている。そして、それを和歌という形で言い表しているということなんです。

平安時代にこのようなことが書かれていることから、今から千年以上も前にも、日本人は「人の思い」というものを大切に生きていたということがわかります。「今に始まったことではない」と私が先に書いたのは、それが理由です。

そう考えると、現代人がインタビューするときにもちを聞いたがるのは、気もちを大切にするとDN Aが日本人に存在するからなのでしょうね。

でも、それはとても大切なことだと私は思います。私たちの祖先が「人の心」を大切にして生活してきたからこそ、人を思いやる心や敬う心、豊かな感情繊細な感覚といったものが今の日本人に受け継がれているのですから。

さあ、学ぶ順番では、芭蕉の前になります。が、中学三年の日本の古典は「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」から始まります。現代人の心の原点をここで学んで

くださいね。



（五月七日 記）